

コンピュータによる仏教混淆梵語の研究 (1)

——仏教混淆梵語写本研究の問題点——

塚 本 啓 祥

§ 1. 仏教梵語文献の特色

日本における伝統的仏教研究は、漢訳仏典を拠り所としてきた。しかし19世紀後半にヨーロッパの仏教研究の方法が日本に導入されて、サンスクリット原典や、パリー聖典、チベット語訳、中央アジアの少数民族語による諸訳が知られるようになり、同一經典に対するサンスクリット原典と異種の訳本とを比較研究することが可能になった。

サンスクリット原典を第一資料として取り上げ得るようになったことは、従来の漢訳のみに頼った時代に比べて、文献の本来の語意を正確に把握することを可能にした。しかしサンスクリットの写本は、伝承の過程における流伝の時代と地域、書写生の出身地等の影響を受けて、言語の音声学・文法学上の変形、語彙の挿入・修正、並びに文献構成の改編等が行われている。しかも、ネパール・チベット系、カシミール系、中央アジア系の写本相互の間に著しい相違が認められる。またチベット語訳は同系の原典からの翻訳とみなされる。

これに対して、漢訳、特に古訳・旧訳の仏典は、現存するサンスクリット写本よりも古く、原典の古形を推定するための多くの痕跡を残している。概して、これらの漢訳仏典は中期インド・アリアン語、すなわちプラークリットを混淆した仏教混淆梵語からの翻訳であるが、新訳（7世紀以降）の原典となった文献においては、梵語化（Sanskritization）が著しく進む一方、語彙の置換・修正がなされていることを指摘できる。これらの事情を勘案して、われわれは仏教混淆梵語の研究のために、資料が変化に富み、異種系統の多くの写本が現存する法華経を、研究対象として取り上げた。

§ 2. 既刊校訂本の問題点

梵文の法華経原典の校訂本は、H. ケルンと南条文雄博士によって初めて出版された¹⁾。このテキストは、ネパール系写本 6 本（11-12 世紀 3 本；18-19 世紀 3 本）及び中央アジア系写本 1 本（7-8 世紀）に準拠し、両系統写本の相違個所を註記しているが、それはすべてに亘っているとはいえない。しかも校訂者の法華

經の理解と判断に基づいて、プラークリット形語彙の混淆したテキストを *Classical Sanskrit* に修正する傾向を示している。ケルン以後に出版された校訂本も同様の編集方針に基づいている。この傾向は梵文法華經原典のみならず、あらゆる梵語仏典の校訂本作成に見られる共通の特色である。

梵文法華經写本は出土の地域によって、

1. ネパール・チベット本
2. カシミール (ギルギット) 本
3. 中央アジア本

の3種に分類できる。写本の数は端本を含めれば60種にも達し、書写の年代も5—19世紀に亘っている。この事実を考慮するとき、これらの写本を一律に取り扱うことは、写本の流伝の系統と形態、使用された言語や文字の特殊性を無視することになり、法華經原典の原形推定に関しても、種々の問題を派生せしめる。

§ 3. 写本の比較—新たな問題の提起

従来校訂本で解決されなかった問題が、写本の比較研究によって解明される3例を以下に示そう。

① Avalokitasvara/Avlokiteśvara

現世の危難を救済して人々に利益を与える観音菩薩の信仰は、インドに発生して、中央アジアから中国を経て日本に伝来し、深く民衆の間に根を下している。ところが6世紀以降の梵語仏典では、すべてが *Avlokiteśvara* (観自在) と記されているのに対して、古訳・旧訳の漢訳仏典では「光世音」「観音」「觀世音」と意識され、新訳では「觀自在」と記されている。これについては長い間疑問がもたれていた。N. D. ミロノフは大谷探検隊によって蒐集された中央アジア出土の梵文法華經断簡²⁾ (5世紀末) に、*Avalokitasvara* (観音) の語が5回現われることを指摘し、観音の原語と漢訳との関係を推定した。

1. 中央アジア出土の梵語写本はこの菩薩名の古形として *Avalokitasvara* を与える。
2. これは通俗的漢訳形「観音」に対比する。
3. A. D. 600年までの中央アジア・中国・インド出身の漢訳者は音 (*svara*) の要素を含む語形「觀世音」(*Avlokitalokasvara*) を用いる。
4. 他に「觀世自在」(*Avlokita-lokeśvara*) 「觀世音自在」(*Avlokita-lokasvareśvara*) が使用された。これは、菩薩の二つの名称 *Avalokitasvara* と *Lokeśvara* の混淆によって表現された。

5. 7世紀に Avalokitasvara-lokeśvara の省略形 Avalokiteśvara が古い形態に取って代り、それが中央アジアに流入し、インドやチベットにはそのみが存続した。
6. 玄奘はこの原語をインドから将来し、これを唯一の正形とみなして「観自在」と訳した。それは文献に採用されたが、中国や日本では古い形態が依然として流行した。

本田義英博士³⁾はミロノフの説を一応認めながらも、玄奘の『一切経音義』に雪山伝来の経本に ś/s の転訛が認められるとする説に着目し、法華経普門品の偈に meghasvara dundubhisvara(雲音鼓音)という句が、ある異本で meghaśvara dundubhiśvara とあって、ś/s の混用例があることを論拠として、Avalokitasvara が *Avalokitaśvara と誤写され、ヒンドゥー教の最高神 Īśvara (自在神)の影響を受けて、プラークリットの連声法から avalokita + īśvara > *Avalokita'śvara (観自在) となったことを推定し、これを梵語の連声法に修正して、avalokita + īśvara > Avalokiteśvara の語形を生ずるに至った、との仮説を提示している。

要するに、5世紀初頭の『妙法蓮華経』では、「この観世音菩薩を聞いて一心に名を称えれば、観世音菩薩は即時にその音声を観じて、皆解脱することを得せしめん」(大正 9, 56c) と宣言している。そして菩薩は人々を救済するために三十三身を現ずる。これは人々に対する仏陀の慈悲の顕現である。大乘仏教の成立とほぼ同じ頃、ヒンドゥー教では最高神 (Īśvara 自在神) ヴイシュヌが人々に対する神の恩寵として権化するという信仰があった。6—7世紀に仏教はヒンドゥー教の著しい影響を受けるようになったとき、上記諸説のような経緯で、Avalokitasvara > Avalokiteśvara の修正がなされたものと推定される。

② Amitāyus/Amitābha

『無量寿経』や『阿弥陀経』によって知られる浄土經典には、阿弥陀仏とその浄土の信仰が説かれている。この經典は、法華経とほぼ同じ1—2世紀に西北インドで成立したものと推定される。

藤田宏達博士の研究⁴⁾によれば、梵語仏典には阿弥陀仏を表わす原語として、Amitāyus (<amita + āyus 無量寿) と Amitābha (amita + ābha 無量光) との二つの梵語名が知られる。しかし、漢訳仏典の音訳では「阿弥陀」のみが伝えられ、意識では「無量寿」と「無量光」が「区別されている。そして『無量寿経』の原典 *Larger Sukhavatīvyāha* には Amitābha が主として登場し、Amitāyus が付随的に記されている。これに対して『阿弥陀経』の原典 *Smaller Sukhavatīvy-*

aha では逆の立場であるという。このことから博士は、無量寿と無量光との二つの信仰形態を浄土經典が統一したことを推定している。

法華經では阿弥陀仏と極楽世界について3箇所で言及される。ケルン本によれば、化城喻品と藥王菩薩本事品では *Amitāyus* となっているが、後期の挿入である觀世音菩薩普門品の偈(阿弥陀仏讚頌)では、*Amitābha* が現われる。藤田博士はこれを論拠として、法華經は本来「無量寿」の系統に属したが、後に「無量光」に修正された、との説を提示している。

さて梵文法華經写本に現われる阿弥陀仏の梵語名は別表「梵文法華經にみられる *Amitāyus* > *Amitābha* の変化」⁵⁾ の如くである。これにおいて6—8世紀のカシミール系及び中央アジア系の写本はすべて *Amitāyus* となっているが、11—12世紀のネパール・チベット系写本には、*Amitābha* への修正が化城喻品と普門品偈の一部の写本に認められる。しかし17—19世紀の写本では、いずれの箇所でもその修正の傾向が顕著となっている。

普門品偈は『正法華經』(286)及び『妙法蓮華經』(406)の原訳には含まれない。ミロノフ転写の大谷本に偈の部分が含まれないのは偈挿入以前の痕跡とみなされる。現行『妙法蓮華經』及び『添品妙法蓮華經』に認められる重頌は、嶋多(Dharmagupta)によって訳(561)され、後に挿入されたものとみられている。漢訳の重頌は梵語原典の1—26偈に相当する。一方6—7世紀には梵語原典では、阿弥陀仏の讚頌(27—33偈)が挿入されたが、これは漢訳されることはなかった。その讚頌の中に(Kern's ed. p. 455, ll. 5-6),

so caiva *Amitābhanāyakaḥ* padmagarbhe viraje manorame/
 siphāsani saṃniṣaṇṇako śālarājo va yathā virājate//32//

そして、かの無量光(カシミール本・中央アジア本:無量壽)導師も、無垢なる美しい蓮華のうてなの中の師子座に座って、シャーラ王のように輝いている。

と述べている。この「シャーラ王」とはシャーラ村のヴィシュヌ神のことであるが、ケルンの校訂本にネパール本の *Amitābha* を採用していることは、法華經が本来 *Amitāyus* の系統に属すると見る見解と矛盾することになる。浄土經典における *Amitāyus* と *Amitābha* の同一視が浄土信仰の主流となり、さらにヒンドゥー教の仏教への影響が顕著となったとき、「シャーラ王のように輝く」という表現が採用され、さらに11世紀以降に、ネパールにおける仏教とヒンドゥー教の交流を通じて、ヒンドゥー教の最高神ヴィシュヌに *Amitābha* が結びつけられて、*Amitāyus* を *Amitābha* に修正することがネパール本の一部でなされたも

梵文法華經にみられるAmitāyus > Amitābhaの変化

<写本>		<筆写年代>	(化城喻品 VII-425)	(藥王菩薩本事品 XXII-196)	(觀世音菩薩普門品XXIV-159)
M	(中阿含系)	5 説	—	—	—
F	(中阿含系)	6	—	—	—
D1	(カミール系)	6-7	Amitāyus	Amitāyus	—
D2	(カミール系)	6-7	—	—	Amitāyu nāyako
D3	(カミール系)	6-7	—	—	—
O	(中阿含系)	7-8	Amitāyus	Amit[]	[]tāyu nāyako
K	(初ノ系)	11	Amitāyus	Amitāyus	Amitāyu nāyakaḥ
Pk	(初ノ系)	11	Amitāyus	Amitāyus	lokanāyako
C3	(初ノ系)	11	Amitāyus	—	—
C4	(初ノ系)	11	Amitāyus	Amitāyus	Amitābhu nāyako*
C5	(初ノ系)	11	Amitāyus	Amitāyus	lokanāyako
C6	(初ノ系)	11	Amitābha*	Amitāyus	Amitābha nāyako*
T2	(初ノ系)	11	Amitāyus	Amitāyus	—
T6	(初ノ系)	11	Amitābha*	Amitāyus	—
T7	(初ノ系)	11	Amitābha*	—	—
N2	(初ノ系)	(11)	Amitābha*	Amitāyus	lokanāyako
N3	(初ノ系)	(11)	—	—	—
B	(初ノ系)	11/12	Amitābha*	Amitāyus	lokanāyako
N1	(初ノ系)	(11/12)	Amitāyus	Amitāyus	Amitāyu nāyako
A1	(初ノ系)	17/18	Amitābha*	Amitābha*	lokanāyako
A2	(初ノ系)	17/18	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
R	(初ノ系)	18	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
T8	(初ノ系)	(18)	Amitābha*	Amitāyus	lokanāyako
T4	(初ノ系)	18末	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyakaḥ*
P3	(初ノ系)	19	Amitābha*	Amitāyus	Amitābha nāyako*
P1	(初ノ系)	19	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
P2	(初ノ系)	19	Amitābha*	Amitāyus	Amitābha nāyako*
A3	(初ノ系)	19	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
C1	(初ノ系)	19末	Amitābha*	Amitāyus	Amitāyu nāyako
C2	(初ノ系)	19末	Amitābha*	Amitāyus	Amitāyu nāyako
T3	(初ノ系)	19末	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
T9	(初ノ系)	19末	Amitābha*	Amitābha*	Amitābha nāyako*
T5	(初ノ系)	(19末)	Amitābha*	Amitāyus	Amitābha nāyako*
Kn	(縮本)	1908-12	Amitāyus	Amitāyus	Amitābha nāyako*

()=推定年代

のと推定すれば、前述の藤田博士の学説は一段と強化されることになる。

③ 陀羅尼呪に見られる梵語化

法華経陀羅尼品には、法華経を受持し、読誦し、書写し、説法する法師を守護するための5種の陀羅尼呪を述べている。また普賢菩薩勸発品では、法華経を受持し、読誦し、書写する者に対して、非人の破壊を免かれ、女人の惑乱を避けるための陀羅尼呪を与えている。

陀羅尼呪は秘密性が要求されたために、語形にプラークリットの特徴を保存しているが、ネパール系写本や密教系儀軌のように年代が降るものの中には、梵語化の進んだものも指摘される。主な例を次に示そう。なお漢訳仏典の音写は B. カールグレン⁶⁾と藤堂明保博士⁷⁾の研究による上古音と中古音に基づき、プラークリット語形の推定は R. ピッジェル⁸⁾と F. エジャートン⁹⁾に拠った。

- ㊦ 正法華経 D sDe-dge Ed. C Chone Ed.
- ㊧ 妙法蓮華経 P Peking Ed. L Lhasa Ed.
- ㊨ 添品妙法蓮華経 N sNar-than Ed.
- ㊩ 種種雜呪経 [大正 No. 1337], A. D. 561-577, 闍那頻多訳
- ㊪ 一切経音義 [大日本校訂縮刻大蔵経, No. 1877], 唐, 玄奘撰
- ㊫ 成就妙法蓮華経王瑜伽觀智儀軌 [大正 No. 1000], A. D. 746-774, 不空訳

(1) [Kern's ed. : ālokabhāṣe pratyavekṣaṇi] 薬王菩薩説陀羅尼呪

觀察光曜[㊬]

阿盧迦娑婆^{蘇奈}簸蕉毗叉賦^{三十}㊭ [*·ar-lo-kār-b'wā-sā-pwā-thiag-bjær-tsa'ār-nīed] = *ālokabhasapaccave(c)chane

ālokabhāṣa pratyavekṣane : M

阿盧迦娑西^{並長声}跋囉^{上聲}帝^{都夜}羣^{蘇迷}叉^{奴皆反}爛^{二十三}㊮ [*·a-luo-kā-b'uā-sei; pub-luo-tiei-pie-tṣ'ā-nīi] = *ālokabhāṣe pratyape(c)chaṇi

阿^長盧迦娑栖^{二十}鉢囉^{蘇奈}祇^{都夜}利^{蘇迷}賦^{三十}㊯ [*·a : -luo-kā-b'uā-sei; puat-lā-tei-pie-k '(iū-)tṣ'vt-nīi] = *ālokabhāṣe pratyapekṣaṇi

ālokabhāṣi apratyavekṣaṇi : D1

阿路迦娑^{去聲}婆(娑)波羅弗^{補没}帝^{三十}鉢刺著^{知也}吠利捍^{三十}㊰ [*·a-luo-kā-b'uā-sa-puā-lā-pīuət-tiei; puat-lā-ṭiak-b' iwvi-tṣ 'ie-nīi] = *ālokabhāṣa-prāpte pratyave(c)chaṇi

阿^引盧迦^引娑^引細鉢囉^{二合底也}𑖀^{二合}𑖩^{微閉反}𑖪^{乞灑}𑖫^{二合}𑖬^{二合}㊱ [*a : -luo-ka : -b' uā : -sei-p(uat-) lā-t(ei-)iai-b' iwvi-k' (iət-)ṣai-nīi] = *ālokabhāṣe pratyavekṣaṇi

(132)

コンピュータによる仏教混淆梵語の研究(1) (塚 本)

alokabhāṣe : K B T6 A1 N2 N3 D2

D P N C L

alokabhāṣe : C1 C2 C4 R P1 P2 T3

T4 T5 T9 A3 N1

alokāvabhāṣe : C5 C6

pratyavekṣaṇi : K N C L

pratyavekṣaṇi : P

pratyavakṣaṇi : C1 C2 C4 C5

C6 B P1 P2 T3 T4 T5

T6 T8 T9 A1 A3 N1

N2 N3 D2

(2) [Kern's ed. : **abhyantarapāriśuddhi mutkule**] 藥王菩薩說陀羅尼呪

究竟清淨無有抗坎㊦

阿亶哆波隸輸地^{余亮反二十五}兜究隸^{二十}㊦ [*·a-tan-tīar-puar-liei-tʃ 'iu-dieg ; ·ug-

kīog-liei]=*attantapariśuddhi ukkule

阿^上顛哆波唎輸^上提^{二十}塢矩黎^{二十}㊦ [*·a-tien-tīā-pua-līi-tʃ 'iu-dei ; ·uo-kiu-

-liei]=*atyantapariśuddhi ukkule/utkule

頻^鳥顛哆波唎^鳥輸^鳥啼^{二十}郁^於究^於犁^{二十}㊦ [*·at-tien-ta-pua-līi-dʒiuēt-d' iei ; ·iuk-

kīu-liei]=*atyantapariśuddhi ukkule

阿典多跋哩舜^{入第三}塢^{第十三}俱黎^{二十}㊦ [*·a-tien-ta-pua-lji-ʃiuēn-dei ; ·ou-kiu-

liei]=*atyantapariśuddhi utkule

atyantapāriśuddhi : N

ukkule : R P1 P2 T4 T5 T9 A3 N1 N2

atyantarapāriśuddhi : K R D

ukkule : T6 T8 N3 D1 D2

atyantarabheriśuddhi : C

utkule : C1 C2 C4 C5 C6 N L

atyantarabheriśuddhi-m-utkulo : P

utkulo : P

udkulo : C

阿闍恒邏波利^{尸聿反}隸^{第五}塢^鳥矩黎^{二十}㊦ [*·a-ben-tat-lā-pua-lji-dʒiuēt-dei ;

·uən-kiu-liei]=*abhyantarapariśuddhi utkule

abhyantarapāriśuddhi : C5 C6 T8 N3

kulo : T3

abhyantaraviśuddhi : C4

udkulo : A1

anyantapāriśuddhi : D2

kukkula : K

(3) [Kern's ed. : **dharma-parikṣite**] 藥王菩薩說陀羅尼呪

而察於法㊦

達磨波利差^{猶離}帝^{三十}㊦ [*dat-mwā-puar-līəd-ts'īār-deg]=*dhammapari-

cchide

達磨波利差低^{三十}㊦ [dat-mwā-pua-lji-tʃ 'ie-tei]=*dhammaparicchite

達磨鉢離器^{三十}㊦ [dat-mwā-puat-ljiē-k' ji-tiei]=*dhammaparikhite

駄^上囉^上磨跛囉綺羝^三⑧ [da-l(jiç-)muâ-pua-ljiç-k'ji-tiei]=*dharmapari-
khitē

達磨跛哩乞史^三帝^三⑧ [dat-muâ-pua-lji-k '(iæt-šiei-tiei] =*dhammapa-
rikṣite

dharmapariṣṭe : K C1 C2 C4 C5 C6 B R P1 T4 T6 T8 N1 N3 P D
N C L

dharmmaparikṣite : P2 T3 T9 A1 A3

以上梵語写本と漢訳・チベット語訳の音写とを比較をすることによって明かな
ように、陀羅尼呪のシラブルの中にサンスクリットのそれに対比されるブラーク
リット形を指摘できる。すなわち, (1) pacca=pratya (BHSG 2, 18); ccha=kṣa
(Pischel 320, 321) (2) tta=tya (Pischel 281); kku=tku (3) mma=rma; cchi
=kṣi; de=te; khi=kṣi (Pischel 317, 319) がそれであって、時間の経過の中で
ブラークリットの語形語彙が梵語化したことを認め得る。

かようにして、梵語仏典の原形推定の探求と並行して、写本変遷の過程を検討
することが不可欠の要件となってくる。よってこれに客観的な資料を提示するた
めに、写本のデータベース化が必要となる。われわれの出版『梵文法華経写本集
成——ローマ字本・索引』全14巻は、この目的のために企画された。

- 1) H. Kern & B. Nanjio: *Saddharmapuṇḍarika, Bibliotheca Buddhica* X, St. Petersburg 1908-12.
- 2) N. D. Mironov: *Buddhist Miscellanea, JRAS* 1927, pp. 249-252; N. Dutt: *Saddharmapuṇḍarika, with N. D. Mironov's Reading from Central Asian MSS., Bibliotheca Indica*, Calcutta 1953.
- 3) 本田義英『仏典の内相と外相』, pp. 211-260.
- 4) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』, pp. 259-335.
- 5) 『梵文法華経写本集成』(*Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarika, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia*) 中村瑞隆・塚本啓祥・田賀龍彦・久留宮円秀・伊藤瑞叡・三友健容・三友量順共著。(但し N1→N2, N2→N1 に修正)。
- 6) B. Karlgren: *Grammata Serica Recensa*, Stockholm 1972.
- 7) 藤堂明保『漢字語源辞典』。
- 8) R. Pischel: *Grammatik der Prakrit-Sprachen*, Strassburg 1900.
- 9) F. Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, New Haven 1953.

〈キーワード〉 仏教混淆梵語, 法華経写本, コンピュータ処理

(東北大学教授・文博)